

## 〈先回りの愛〉

ジャーナリスト  
松本 侑壬子

英原題の「チャイルズ・ポーズ」とは、胎児の体勢、すなわち赤ん坊が母親の胎内で丸まっている姿勢の意。親が我が子を育む愛情が、実は子どもを窒息させている、子どもの自由な成長を邪魔している、というのだ。また、北欧では、我が子の前に立ちふさがる障害物を先回りして取り除く過保護の親を「カーヴィング・ペアレント」と呼ぶとか。我が子が行く手をブラシで「ごしごし」と磨くに似た親の姿。「我が子のためなら、何だつてする」と胸を張る親は世界中にいる。これは、監督自身が自らの経験に基づいて描く、子離れできない母親と自立できない息子の愛の泥沼の物語。救いはあるか。

ルーマニアの首都ブカレストに住む元建築家で舞台美術家のコルネリアは、大病院の医師である夫と二人暮らし。三〇歳を過ぎた息子バルブは定職もなく親が丸抱えのまま家を出て、市内でシ

ングルマザーの恋人と同棲中。コルネリアは誕生日パーティーを、自宅に町中のセレブたちを招いて華やかに開いたが、顔も見せない一人息子のことを聞かれるのがつらく、情けない。そこへ警察から息子が交通事故で子どもを死なせてしまったとの一報が。警察署に急行したコルネリアは、見る影もなくやつれたバルブの姿を見るや奮い立つ。息子に不利な調書を書かせまいと、取り調べの場を仕切り、あまつさえ調書の内容を無理に変えさせて担当警官の怒りを買う。だが、警察上部にコネの利く彼女に地元警察は抵抗できない。パーティーの場面といい、この警察の場面といい、この国の腐敗したコネ社会ぶりがさりげなく、しかし痛烈に描かれている。

仕事も収入も人脈も申し分ないパワーウーマンが、夫を押しつけて一人で息子を守るために立ち回る。弱みにつけ込んで個人的な頼みごとをする警官、証

言内容を金次第でいかようにも変えるしたたかな目撃証人とのタフな交渉など獅子奮迅の働きぶり。だが、バルブは母親に感謝するどころか自分は一切関知しない、と殻に閉じこもり、果ては家族の協力に対して怒りを爆発させて席を立って出て行く始末。

このままでは息子は刑務所行きだ。被害者の親に告訴を取り下げてもらうしか方法はない。コルネリアは必死でバルブに相手側に謝罪するよう説得するが、耳を貸さずともしない。さすがのコルネリアも息子の心を測りかね万策尽きたとき、バルブの恋人カルメンが母親の知らない息子の一面を静かに語り始める。息子に良かれと思つて懸命に尽くしてきたが、カルメンの話はその結果？を問いかけるものだった。

母の愛は純粹か。だれのための愛か。その愛は本当に子ども自立のためのものか。いや、コルネリアに限らず親にとつて、答えの出しにくい問いだ。少なくとも、自信満々で答えられる問いではないだろう。

それでも、何とかしなくては。追い詰められたコルネリアは、ともあれ被害者宅に向かつて車を走らせるのだが……。バックミラー越しに見える一瞬の光景は、天の恵みか。見事なラストシーンだ。



## 『私の、息子』

ルーマニア映画(112分)

監督：カリン・ペーター・ネッツアー

出演：ルミニツァ・ゲオルギウ、ボグダン・ドゥミトラケ、  
ナターシャ・ラーブほか

公開中

© Parada Film in co-production with Hai-Hui Entertainment All rights reserved.